

「禅の国際化と私の役割」

——客員教授としてスリランカ仏教徒に対する啓蒙——

城西大学教授・文博 森 祖道

スリランカの仏教は、西暦紀元前三世紀のアショーカ王の時代に、インド本土より伝来して以来、ざっと二千二百年以上の伝統を誇つている。しかもこの国のいわゆる上座部仏教は、釈尊自身の仏教に直結する正統派と彼等が固く信じ、かつ他の南方上座仏教諸国ルーツである

トガル・オランダ・イギリスと続く西欧キリスト教国植民地支配を長く受け、その間のキリスト教徒による直接間接の弾圧迫害の結果、仏教は滅亡の危機に瀕したこと也有った。

第二次世界大戦後のスリランカの独立回復は、彼等の伝統文化と不可分である仏教をその精神的支柱として達成され、仏教は立派に復興された。そして昨年には、この国はついに憲法を改正して、仏教を正式に「国教」と定めたのであった。特に近世以降、この国はボル

しかしながらその反面、彼等の上座部仏教は、独立後四十数年を経た今日、ようやく新しいきざしを見せ始めている。それは彼等の間に次第に日本の大乗仏教、特に禪に対する関心が高まりつつあることである。例えば、最近、曹洞宗系のスリランカの比丘の努力で、この国に禪宗



様式の坐禪堂が初めて建立されたことなどはその好例である。これなどは、今から二十数年前に私がこの国に初めて留学した時代には、到底考えられなかつた新しい傾向である。またスリランカの比丘が何人も日本各地で禪を学び、日本仏教・大乗仏教を研究しているのも同様の事例であろう。そしてこの様な新しい動向は、近年の国際化、情報化社会の進展と、戦後世界におけるわが国の驚異的な経済進出と地位の向上という状況と決して無関係ではあるまい。

右に説明した様な上座部仏教国スリランカの日本仏教・大乗仏教への新たな関心の、別的事例として理解出来るのが、今回私が関係を持つた大学における日本仏教講座の創設という問題である。すなわちそれは、国立ケラニヤ大学のパーリ学仏教学大学院 (Post graduate Institute of Pali and Buddhist Studies) に日本仏教関係の講座を新設して、日本人学者を客員教

授として招いてその担当者とするという計画である。現在の時点で、この計画がスリランカの大学にとつていかに画期的な試みであるかという点について、次に若干の説明を加えておきた。まずその第一点は、従来のこの国の仏教学は、ほとんどパーリ語文献に基づく原始仏教・上座部仏教の研究だけであり、わずかに大乗仏教の研究であったとしても、それはサンスクリット語文献に基づくインド大乗仏教の研究にはほぼ限定されていた。従つて「漢文系の日本仏教」についてはほとんど何も知られておらず、また彼等は知ろうともしなかつた。今回の計画はこの壁を初めて破ろうとするものである。第二点は、独立後のこの国の大學生においては、少なくとも人文・社会科学系の学問分野に関するところでは、國語たるシンハラ語（ないしはタミル語）による授業のみを許可し、英領時代からの英語による授業を禁止した。かかる措置を採ること

によつて、植民地時代から残つていたイギリス人などの外国人教師を一掃して来たわけである。これは彼等のナシヨナリスティックな国民感情の現れであり、従つて恐らく英語によつてしか講義の出来ない日本人学者が教授する機会も全く閉ざされていたのである。ところが例え大学院レベルの限定された機会とは言え、ケラニヤ大学の「英語による授業のコース」の今回の新設、及びそれによって実際に初めて可能となつた、日本人を含む外国人学者の受け入れは、この点で実に画期的な改革なのであって、責任当事者の識見は高く評価さるべきであろう。現にこの改革によつて、当大学院は日本ののみならず、同じ大乘仏教の國、台灣との交流も画り、今年より早速、台灣からも客員教授を招聘したと聞く。第三点は、スリランカの大学の悲しむべき現状に関するである。時折、報道される様に、スリランカ国内は目下、シンハラ人対



タミル人、あるいはシンハラ人の過激派ゲリラによる内紛抗争が長期化し治安も必ずしも良くない。過去二、三年の間、この国の全大学は閉鎖されていたが、最近になってようやく正常化されて授業は再開された。しかしこの混乱の後遺症は重く長く後に尾を引くものと推察される。しかしながらこの混乱の中で、ただ唯一の例外がケラニヤ大学のこの大学院であつたのである。ケラニヤ大学自体も、コロンボ郊外のケラニヤにあるそのメインキャンパスは、最近まで閉鎖されていたが、右の大学院だけは、コロンボ市内の別の独立した敷地に設置されている事情も幸いして、とにかく終始、正常な教育研究活動を続けていたのである。この様な非常に困難な国情の中で、この大学院が新しい試みを着々と実行していく積極的姿勢は全く貴重である。従つてわれわれもこの様な時期にこそ、国外よりもこれに対応出来る限りの援助

協力をすると必要があると考えるのである。

さて次には、いささか私事にわたつて恐縮であるが、本題との関連で私自身のことについて若干の説明をする。

私はかつて高校卒業後、五年の間、大本山總持寺などにおいて禪の実修をし、その後、駒沢大学の禪学科を卒業した。そして東京大学大学院に在学中に、スリランカに留学し、パーリ語文獻や南方仏教の勉強をした。以来、スリランカの学者とは学問的交流を続けているので、この因縁によつて、今回の招聘が実現したわけである。彼等は、私が日本の学者として日本の仏教とスリランカの仏教の両者について知識を有するので、講義に際しては、この両者を比較する視座より講ずることが可能であり、そのことによつて学生の理解を容易ならしめるものと期待している様である。このことは私への招聘状の中にも述べられている。そしてこの様に、外国

人に対して自國の伝統文化や精神的所産を教示する場合には、相手側のそれらや国情などによく通じていることは本当に大切なことであると考える。

大学院で私が講義する講題は、(1)日本における禪仏教、(2)日本の仏教文化、という二題である。当大学院には、専攻課程、修士課程、博士課程の三コースがあり、これがそれぞれ「英語による授業のクラス」と「シンハラ語による授業のクラス」と「シンハラ語による授業のクラス」とに分けられている。私は今回「英語によるクラス」の専攻課程と修士課程の学生を対象として講義する(博士課程は論文作成の指導だけで授業はない)。当初の予定では、私の二つの講義は右の両課程に一つずつ振り分けられるはずであつたが、先方の希望で、この両課程の学生の合同クラス(約四十名程の予定)を臨時に作り、両方の学生に講義を二つとも聞かせる様な措置が取られることになつた。この点

にも彼等の期待の大きさが感ぜられ、責任の重さを痛感する。

伝統的な上座部仏教の国、スリランカの大学に初めて日本仏教の講座が開設され、しかも禅が初めて、教示される機会が訪れたことは、私個人はもとより、少々大げさに表現すれば、わ



が国の仏教にとつても正に画期的なことで、その歴史的意義は小さくないと考える。勿論その講義内容は「対機説法」的でなければならないので、初步的啓蒙的なレベルを超えることはあり得ないであろう。しかしとにかくスリランカの仏教徒大学院生を対象に、日本の禅と仏教文化について講ずることは有意義なことと考える。この国の大学や大学院への進学率から考えても、彼等がエリート中のエリートであり、将来の指導者となる存在であることは間違いない。しかも聞くところによると、その大学院生の中の約半数近くは上座部の若き比丘たちである。出家在家を問わず、私の講義の受講生の中から、将来、スリランカの仏教を担い、日本とスリランカの仏教交流に尽力し、そしてもしもスリランカに日本の仏教、特に禅を広める様な人物が出現するとすれば、それこそは私の本懐である。